

2021年6月20日 第7回オープンミーティング報告

2021年6月20日、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

テーマ： オーストラリアにおける P4C 研修プログラム（レベル1）参加報告

報告者 松山 美稀 （メルボルン在住）
司会 森本 和夫 （枚方市小学校教員）
時間 午後3時～午後4時30分

参加者は基調報告者と司会以外は、運営委員4名、一般の参加9名、の計15名

概要

自己紹介

発表要旨

オーストラリアにおける P4C 研修プログラム（レベル1）参加報告
学んだことの報告

FAPSA (Federation of Asia-Pacific Philosophy in Schools Associations) の研修の一環である

VAPS (Victorian Association for Philosophy in Schools) 主催の研修

LEVEL 1 – Community of Inquiry（年2回の開催）

3日間参加、2週間おき 参加者は30名くらいで9割は教員、教育学部学生

初心者向けの内容

教職員向け

コロナのせいで、完全にオンライン（香港から10名ほどの参加）

1日目

P4C について

対話を深める質問方法

絵本を使った対話

コンセプトゲーム

2日目

ソクラテスゲーム

ウォーミングアップ、アクティビティ

3日目

アート鑑賞 VTS (Visual Thinking Strategy)

テーマ・コンセプトがある3枚くらいの絵（例えば、自然の絵、公園の絵、似通った絵）を見比べて、それを元に、全体的なイメージ、共通点などを話す。その後1枚の絵を選び、VTSをして、問いを立てて、哲学対話をする

絵本を使った対話

読み聞かせ

生徒による問い出し（不思議になったこと、気になるところ、板書）

テーマ・キーワードに分類（友情、孤独、裏切り・・・）

問いを選ぶ【問いは4通りに分類される。観察／リサーチ／推測／てつがく】

対話

コンセプトゲーム

絵などを用いて、概念、基準を出す→平等、公平を考える。絵本の一部を使うことも可能

ソクラテスゲーム

質問力を鍛える、考えるれんしゅう、言語化するトレーニング

ウォーミングアップとしても使える

二人一組：質問者と回答者、回答に対して問いを重ねていく：「ペットを飼うなら？」「死ぬ前に何を食べたい？」

ファシリテーターの役目

子どもに考えさせる役目。特に初めはファシリテーターの役割が大切。様々なアクティビティを考える。

対話後のフィードバックが大切。振り返り

どんなフィードバックか？

Q：どうしてこのプログラムに参加したのですか？

A：日本との違いを知りたかった。

Q：日本とオーストラリアとの違いとは、具体的に？

A：オーストラリアは論理的・批判的思考を重視している。

Q：参加対象は

A：学校の先生向けなので、先生が多かった。

Q：thought-provoking的なコンセプトゲームが面白い。このようなもののリストはないか。

C：ミーティング参加者からいくつかの例が挙げられる。

Q：キツネの絵本による研修。国語でもやれるのではないか。哲学的な問いまでやる。日本でもやっている感じはする。

C：海外との比較。中学1年の教科書。成長過程の物語。話し合うことによって分かり合えるようになる。

海外では口頭試験が必ずある。自分の意見を言うことは当たり前。日本とは違うのではないか。それを考える際に問いの分類が大切かなと思った。

Q：子どもたちの違いは？

C：多様性とか同調圧力は地域によって受け止め方が異なる

P4Cの目的、論理的思考力を培うのに対し、いろいろな意見を聞き合おうという点で違い。

そもそも意見が違うということから出発しているのに、同じ文化圏にあることから違いを見る。

元々違うことから、合意形成、違いの根拠を知る。

同じように見えていることから、違いを発見する。

C：教育の目標は会社員の育成ではなく、個人事業主にする事だと考えています。地域社会が義務教育を終えたヒトが個人事業主として貢献できる用意をする。これを実現するには、担任一人でクラス全員の学習指導をするには限界があります。生徒ひとりに先生10名の体制を地域で準備をする。

Q：フィードバックがよかったということですが？

A：方向性をファシリテーターがきちんと持っていたという感じがある。

C：日本とAUの文化的背景の違いからファシリテーターの役割、教育の目標まで、いろいろあるなと感じました。

(Qは参加者からの質問。Aは報告者からの回答。Cは参加者からのコメント等)

Zoomの場合、顔出ししないで参加している人の場合、チャットでしか話ができず、時間差があって、応答がうまくいかない場合がある。このような時はどうするか考える必要がある。

以上
文責 梶形